# *My Harp, My Life* 私の楽器

## 『アリアンナ』

ハープとの出会いは、確かに巡り合わせではあるのだが、実は引き寄せる力も重要というお話。演奏家として講師として、ハープの音色に関して明確な美意識を持つ濵田久実さんのメイン楽器は、サルヴィ・アリアンナである。オリーブ、ローズウッド、メープル、エボニーなどから成る支柱の象眼模様が目を引く、見るからにいかにも職人の手が掛かった名品だ。サルヴィ使いで一線級の方は、ミネルヴァやイリス、アポロといったステージで比較的鳴りの良い楽器を選ぶ傾向にある。それに対して、ヴィクトリアやアポロニア、そしてこのアリアンナなどは、まるで美術品のような外観で「音は若干硬めである」と巷間伝わっているようだ。しかしながら、実際はその楽器の精度ゆえに、正目でないとスパッと切れない魚の兜のように、正しい鳴らし方をわきまえていないと大きく響いてくれないというのが正しいようだ。つまり、「弾き手を選ぶ楽器」でもあるということだ。

最初の出会いは、師が持っていたアリアンナに触れたこと。その音色がずっと印象に残り、いつしかメイン楽器にと、垂涎（すいぜん）の一台に対して虎視眈々。フランスに赴いた際、買って帰ろうと決心したものの、ただでさえ生産台数が少な目であり、時節はアポロがイチ押しの時代だった。やっと試弾できた一台も修理で顧客から預かったものということで購入に及ばず。「当時は、銀座十字屋はまだサルヴィの総代理店ではなかったから」と、濵田さんはハープの購入自体がたいへんだった当時を振り返る。そして、再度渡仏。その際も店員によるアポロの売り込みやカマックの誘惑に、何度か心が揺れそうになるが、ついに売り物であると目の前に現れたアリアンナに改めて惚れ直して購入した。濵田さんにとって、まさに大恋愛の末に引き寄せた〝フランスの恋人〟なのである。「誤解されているようですが、アリアンナは音が鳴らないのではないです。芯がある音質で、芯があるということは正しく弾くと遠くへ響くのです。巧い役者さんの声は、大きな舞台に立ってもノー・マイクで響くことに似ています」と、〝恋人〟の魅力を語る濵田さんだが、無論それらをコントロールしているのは演奏者自身であり、アリアンナの媚びない音の資質と楽器の個性を理解し活かしているのは、濵田さん本人に他ならない。個性といえば、濵田さん自身もかなりの個性派である。アリアンナを通じ、すっかりサルヴィハープのファンになり、その後レバーハープでタイタンを、ラップハープでジュノーをそれぞれ買い求めた。無論、店頭に並ぶ楽器をそのまま買う御仁ではない。タイタンは、レバーのほとんどがツヤ消しであるのに、敢えてツヤ出しを特注。お持ちのジュノーのカラーは、第三者の目には少々痛い（失礼）ピンク! もうお分かりだろう、濵田さんの個性が、これらのハープとの出会いを引き寄せたのである。

濵田 久実

## EVENT SQUARE イベント・スクエア

- 2/9 高原由美子（ハープ）小林美香（フルート）東京・茗荷谷ラ・リール
- 3/8 早川りさこ（ハープ）渡辺克也（オーボエ）安藤康弘（詩文・朗読）朗読コンサート「道」東京・紀尾井ホール
- 3/21 佐藤杏樹ハープ・リサイタル 東京・文京区同仁キリスト教会
- 4/13 ヤナ・ボウシュコヴァ ハープ・リサイタル2019 長野市芸術館
- 4/14 ヤナ・ボウシュコヴァ ハープ・リサイタル2019 愛知県江南市永正寺本堂
- 4/15 ヤナ・ボウシュコヴァ ハープ・リサイタル2019 東京・パルテノン多摩小ホール

## The Last Chorus

**●WEBハープライフがスタート!**

読者の皆様の好評を受けまして、1月29日に、本誌ハープライフのWEB版をリリースすることになりました。誌面だけではお伝えできないニュースや記事を、動画や写真を交えながらお伝えしていきます。ぜひアクセスしてみてくださいね。
URL：https://harplife.jp/

**●GTF会員講師募集中**

銀座十字屋では、各地のハープ講師や教室運営をされている皆様が、情報交換やお得な各種サポートを受けられるコミュニティ・サービス「GTF（銀座十字屋ティーチャーズ・フォーラム）」を開設、引き続き講師の皆様の参加を募っております。また、GTFの各地提携教室と講師の情報は、銀座十字屋HPに掲載されていますので、お気軽にお立ち寄りください。
○銀座十字屋HP　http://www.ginzajujiya.com/

情報寄稿先：harplife@ginzajujiya.com　発行人/倉田恭伸　編集人/森　泰義

A MAGAZINE FOR THE HARP PLAYER

# HARP LIFE

02
2019

ハープと皆様を繋げる
オンリー・ハープなフリーペーパー

FOURTH ISSUE
Vol.4

MINERVA GOLD

# DAVIDE ARDUINO TALKS

## 世界一のハープ職人
## ダビデ・アルドゥィーノかく語りき

世界三大ハープメーカーのうち、サルヴィとライオン&ヒーリーは同じグループの会社であるため、そのシェアはおよそ8割にも及ぶ。その2つの技術部門のトップに立つということは、その技術者は世界一と言っても過言ではないだろう。このほど、サルヴィハープスの最高技術責任者ダビデ・アルドゥィーノ氏が来日したので、お話を伺った。

**—技術者の目から見て、あなたが「サルヴィハープこそが、世界でNO.1のハープだ」と言い切る根拠は何なのでしょうか。**

ダビデ：音に対する一切の妥協を許さないということでしょう。他社のハープは知りませんが、我々は同じモデルを何年にもわたって作るにしても、5年前と現在では同じ名前を冠したハープでも、構造がまるで違っていたりする。修理やメンテナンスを通じて、顧客の声を聞き、そのモデルの不具合や改善点を見つけると、一度立ち止まって考え、直すべき点はためらいなく変えてしまうのです。効率のよい仕事とは言えないかもしれませんが、結果的にはそのほうがより良いサウンドを導けるのです。工場の中にマーケティング部門がある楽器屋さんというのは、世界でも珍しいでしょう。何においても音が最優先。会社が大きくなればなるほど、そういうポリシーを掲げることは難しくなってくるはずです。我々は何かを犠牲にしても、信じる音の追求を続けているから、自信があるのです。

**—楽器作りの情熱は、創業者のヴィクトール・サルヴィから伝承されたものと思いますが、彼はどんな人物でしたか?**

ダビデ：仕事上の父であり、厳しくも優しい上司でした（笑）。無茶振りの達人でね。創業者なので、設計から組み立てまでやったと思われがちですが、実はハープ奏者だった頃の理想形があり、それを作れと命じるだけだったのです（笑）。言うのは簡単でも、形にするのは難しい。当初、スイスのハープ職人を呼んで制作していましたが、彼らは「そんなものできるか」とふてくされ、我々は次第に自前で職人を持つ必要を感じ、私ともう一人が技術者として育てられました。その後、スイスの職人は私へ技術を伝授するためだけにイタリアへ呼ばれるようになったのです。あれからもう23年も経ってしまいました。ヴィクトールは明るい性格で、上下関係など全く意に介さず、我々は理想のハープのあり方を、工房の片隅で語り明かしたものでした。彼はむしろ「理想しか、現実にはならない」と考えていたと思います。自分がハープ奏者だから、確固たる理想形がすでに描けているから妥協がないわけです。それが今のサルヴィハープスにも伝播しているのかもしれません。二代目のマルコも、性格は似ていますよ。

我々の技術の集大成を棚卸しすると共に、創業者亡きあとでもサルヴィが最高のハープの作り手であることを立証する。

**—今まで多くのハープの製作を手掛けてきたと思いますが、一番印象に残っているハープは何ですか?**

ダビデ：（即答して）ヴィクトリアでしょう。最終的に名前をつけたのは、現社長のマルコだと想うのですが、ヴィクトール亡きあと、我々の技術の集大成を棚卸しすると共に、創業者亡きあとでもサルヴィが最高のハープの作り手であることを立証する必要性を、心のどこかで感じながら、工場が一丸となって制作した思い出があるのです。それこそ5年近く構想を練り、ひとつの工程で半年もかけた部分もありました。経験上、ここまで手塩にかけたハープはありません。普通の会社なら、道楽と笑われるでしょうね（笑）。サルヴィだからこそ許される物作りだと思います。

自らは決して面白いことを言いだすわけではない、しかし無粋ではない。今回、幾つかのハープをメンテナンスする場面に遭遇したが、1台にかける時間は3—4時間、一心不乱に調整していた。黙々と作業する姿は、まさにザ・職人といった感じだ。鋭い眼光と笑顔のギャップに、温かい人間味が垣間見えた。

# PORTRAIT OF DAN YU

## 来日インタビュー：ダン・ユー
## ～東洋からの風を感じて～

かつて女子フィギュアスケートで五輪銀・銅メダルを獲得、ワールドカップも5度制覇したミシェル・クワンを想起させる。並み居る競争相手はほとんど白人ばかりの中、クワンは中国系アメリカ人として孤軍奮闘した。そんな状況下、体格差をもろともせず、超絶技巧に走るでもなく、基本を大切にして、美しくたおやかな滑走・円舞で世界を魅了した。ダン・ユーは、いわばハープ界ではクワンのような位置づけなのかもしれない。USA国際ハープ・コンクールを制した際は、世界が瞠目したものだ。東洋人で三大ハープ・コンクールを制したのは、我らが吉野直子とダン・ユーが先駆者だった。「柔よく剛を制す」ではないが、まさに栄光の頂点に浴した彼女にインタビューを試みた。

**—やはり男性ハーピストの演奏のほうがパワフルに聞こえてくるように、どんなに否定してもハープには体格差というのが、どうしても付きまとうと思います。今まで世界各地で演奏し続けてきて、東洋人であるということで、何か意識したことはありますか?**

ダン・ユー：強烈なダイナミクスを持つ、速いテンポで大きなレンジでのアルペジオや、コードでパッセージを弾くときは、私の比較的小さな手と身長を恨むことはあります（笑）。ですが、それはステージで演奏する以上、東洋人であるというハンデは一切感じません。

**—自信を盤石にするため、日々あなたがどのような練習をされているのか教えて下さい。**

ダン・ユー：私の毎日の練習は、遅いテンポから速いテンポまでの片手スケール練習から始まり、アルペジオ、リズムの履習が主です。時には、私がいま取り組んでいる作品から、技術的に難しいパートを取り出して、その反復練習を行うこともありますね。

**—最近、取り組まれていることは何ですか?**

ダン・ユー：ワールド・ハープ・アカデミーに参加しました。世界のハープ教師、高名なハーピストらと共にオンライン・レッスンを推進しています。幸運なことに、香港には毎年のように多くの有名ハープ奏者が来てくれて、十分な学習機会があります。ただ、そうでない地域はまだたくさんあり、我々の声やレッスンをどこでも受けることができるよう、これからの活動域を広げてゆく予定です。

> 我々の声やレッスンをどこでも受けることができるよう、これからの活動域を広げてゆく予定です。

多くのコンクールで、最近は東洋人のエントリー、とりわけ中国人が多い。ダンさんは人種間の格差は意に介さず、自らがそうであったように、むしろハープに賭ける情熱こそが未来を拓くことを強調していた。中国では、子供の未来を親が熱烈にサポートする。経済の好調を受け、その傾向はますます大きくなるだろうとも。しかし、彼女が云わんとした事の本質は、「どの国であろうが、誰であろうが、ハープに捧げた時間と愛が夢を叶える」ということだろう。控えめながら凛とした女王様のような彼女の瞳が、そう語っていた。

Special cooperation of Ava Lau / Hong Kong Harp Chamber

# Introducing SOFIA KIPRUSKAYA

編集長インタビュー

## 私がビギナーだった頃

ソフィア・キプルスカヤ

本格的なソロ・コンサートの来日としては初めてとなる、ロシアの新星ソフィア・キプルスカヤと話をすることができた。彼女の魅力を一言で言い表すとしたら、「ギャップ萌え」だと思う。クール・ビューティな外貌。ロシアで鍛え上げられたという才能。事前にビデオで観た男勝りのハープ・テクニック。そうした要素から、かなり圧倒されるのではと対話に臨んだら、実際のソフィアは物静かで無類の練習好き、笑顔が素敵な可愛らしい女性であり、才能は元より「これでは、周りもサポートしたくなって、放っては置かないだろう」と思えるキャラクターだった。

**ハープに愛があるか。練習しないと罪悪感を覚えるくらいがちょうどいいのかも知れません。**

**—今回の来日では、コンサートでの演奏のみならず、多くの若い才能に出会う機会もあったと思いますが、あなたがビギナーだった頃はどんなハープ奏者だったのですか?**

ソフィア：それまで私は、ヴァイオリンとバレエを習っていました。8歳の時に、母に連れられて行ったコンサートでハープに出会い、すっかり虜になってしまって、母にせがんでハープを習い始めました。しかし、ヴァイオリンも同時に訓練を並行していたのです。ハープをメインの楽器に決めて、ヤナ・ヴォウシュコヴァ先生に師事したのですが、今思うと実はハープ以外の楽器を習うとか、ハープ以外の楽器奏者と頻繁に共演するとか、常にハープが興味の中心ではあっても、他の楽器への関心と共演機会を失わずにここまで来たのが、とても良かったと思っているのです。

**—今日も5時間以上、ハープの練習をされていましたが、やはりハープへの愛は強い?**

ソフィア：確かにハープは大好きです。ただ、練習していないと感覚が失われるのが怖く、ごく自然に練習を日常に取り入れるようにしています。当然、波もあります。そんな時のために、ハープ以外のことに目を向けるのも大切だと思います。普段は、サンクトペテルブルグでハーピストの他に、美術館や資料館で仕事もしています。最近、ハープを愛した旧ロシアのエリザベート妃が実際に使用した楽譜を発見し、今回のコンサートでも披露しましたし、文献を紐解いているうち、ムソルグスキーとチャイコフスキーのオペラのハープ譜も見つけ、今回演奏しました。チャイコフスキーの「スペードの女王」のハープ譜を演奏するのは、日本初と聞いています。あ、結局ハープの事を考えていますね（笑）。

**—これはどのハープ奏者も考えることですが、どのような手法で上達したのでしょう。**

ソフィア：魔法はありません。練習しかないのです。もっともその前に、ハープに愛があるか。練習しないと罪悪感を覚えるくらいがちょうどいいのかも知れません。あとは精神衛生上、練習の成果を、まずは自分のペットたちに聴いてもらうことですね（笑）。

…今は、ロドリーゴやヒナステラの曲の掘り起しに挑んでいるというソフィア。外見のゴージャスさとは裏腹に、意外と学究肌なところもあるのだ。うーん、ますます萌えるなあ。

Sneaking in report

# STUDIO CROCE

潜入レポート

## いま話題の「スタジオ・クローチェ」に行ってみた

2019年3月31日まで、初めてのご利用に限り、曜日・時間を問わず、1部屋1時間=1,080円で利用できる。

GINZA JUJIYA

師走の街の喧騒をぬって、東京・吉祥寺にアコースティック楽器専門の貸スタジオができたということで、「物は試し」とばかりに〝潜入〟してみた。

クローチェ、か。銀座十字屋が運営しているので、十字架を意味するイタリア語でクローチェなわけですね。場所は、JR吉祥寺駅北口から至便の3分。少々怪しい通りを抜けると、あった、あった。地下にあるんだな。これなら楽器も、思い切り練習できますね。瀟洒（しょうしゃ）なエントランスから入ると、なんとも静謐（せいひつ）な佇まいが現れた。トーンが、銀座十字屋の銀座サロンのブースによく似ている。外界とは別世界だ。入って左手がロビー部分で、座るのもはばかられる小綺麗なイスが並べてある。座って順番を待ちながら、どこか澄んだ空気、東京っぽくないと言ったら語弊があるが、地下によくありがちな、詰まって空気が淀んだ感じがしないなと思った。伺ってみると、完全禁煙である上に、何と全室に酸素クラスターイオン装置が設置されているのだという。人間、酸素が足りてないと、集中力を欠いたり、動きが緩慢になってしまったりするデメリットが生じるというが、入室した際の清涼感は、この装置がもたらしていたのか。遠い昔、バンドを組んでいた頃の貸スタジオのイメージって、タバコの煙モクモク、待合の椅子も折り畳みイス、ロビーには「勝手にコーラでも買って飲め」とばかりに、お客用のスペースよりでかい自販機が鎮座していたものだ。クローチェでは、そんな先入観は吹き飛んでしまった。

スペックをチェックしてみると、総部屋数は5室。およそ2.8畳～4.3畳の広さがある。練習ならば、十分なスペースではないだろうか。そして驚いたのが、全室にハープとアップライトピアノ（一部、デジタルピアノ）が設えられていることだ。今までどちらかというケースはあったが、両方というのはありそうでなかった。ハープ弾けない人にとっては、むしろ邪魔にならないかと思ったりもするが、裏を返せばそんな方々にこそ、この機にハープに触れてもらって、その音色の美しさを体感してほしいという店側の思惑も透けて見える。確かに、非ハープ奏者にとって、ハープなんて通常は滅多に弾ける楽器ではない。しかも、ペダルとレバー両方のハープが置かれている。こうしたハープとの接触機会が普通に準備されているというのは、ユニークでありがたい配慮だと思う。気になる利用料は、平日ならば1部屋1時間で1,080円～。土日でも1,944円。3時間パックや6時間パックというお得なサービスもある。営業は、平日10時から21時。土日は、スタートは10時からだが、閉店が土曜は19時で日曜が18時となっている。居心地の良さと至便さを追求した、アコースティック楽器の練習場。今後も普段使いで入り浸りたくなる貸スタジオだった。

# Harp Caravan

ハープ・キャラバン第4回

## 銀座十字屋号 展開中

お客様が東京・銀座にいらっしゃれば、いつでもハープの試奏もしていただけるし、お気に入りのハープを見つけていただける…銀座十字屋は、そう自負してきた。一方で、最近になって、「東京よりも近隣でハープを吟味したい」というお客様の声が増えてきた。そこで銀座十字屋が始めたサービスが、各地におけるハープ展示会の開催である。今までも時折、訪問修理の際に偶発的に行ったことは多々あったが、今では予めリサーチの結果やお客様の声を反映しながら、ほぼ定期的に各地を巡回するようになっている。一定数のご来場が見込めれば、フットワークを軽くして、人気のハープや楽譜などを銀座十字屋号に詰め込んで、あなたの街へお邪魔している。

下関会場では、駆け付けてくれた上利講師によるレバーハープのデモ演奏も行われた

インターネットの発達によって、何でもネット上で決済ができ、買った商品は自宅まで運ばれてくるという、便利な世の中になった。だが、さすがにハープともなれば、一生のうち何度もないであろう買い物でもあるし、個体差や特徴が一台一台違うわけで、誰しも実際にハープに触れてみて試弾しながら、自分に合った一台に出会いたいだろう。そうした声の反映として、お客様に本物を体感頂く機会を増やす意図がそこにはある。期せずしてイタリアのサルヴィハープスでも、イタリア国内はもちろんヨーロッパ中をトラック数台で訪問して、ハープの販売や相談会を行う〝アピリッシマ〟という催しが始まっている。これもまた、ひとりでも多くのハープ・ファンを作っていきたいという想いの顕われだ。

### 銀座十字屋号、次はあなたの街へ参ります!

やはり高度情報社会だからこそ、より温もりのあるサービスに注視したいという想いは、万国共通なのだろう。ちなみに、直近で開催したのは、山口県の下関と愛知県の名古屋市内、大阪府の大阪市といったところ。「ぜひ、皆様からのリクエストも募って、色々な街へ伺いたい」とスタッフ一同、意気込んでいる。次は、あなたの街へ参ります。

大阪会場

名古屋会場



# 季節のおすすめハープ Vol.4

季節ごとに、毎号1台ずつ
銀座十字屋がおすすめする、
素敵なサルヴィハープ。
今回は「ダフネ」です。

音の鳴りとエレガントな響き。

新春を迎え、これからハープを弾こうとされる方や、そろそろマイ・ファースト・ハープが欲しいと思われている方にお勧めしたいのが、ダフネ・シリーズです。このモデルがユニークなのは、ひとつのモデルでコンサート・グランド、セミグランド、スモールサイズを揃えてあり、各自の体の成長やハープの上達に合せてお好きな一台を選べるのです。正確には、ダフネ47EX、ダフネ47SE、ダフネS、ダフネ40というラインナップがあります。47EXがグランド、47SEとSがセミグランド、40 が40弦へスケールダウンすることでコンパクト化を実現したスモールサイズのペダルハープとなります。カラー・ヴァリエーションは、マホガニー、ウォルナット、ナチュラル、エボニーがございます。

サルヴィでの位置付けはエントリー・モデルですが、だからといってサルヴィの工房は妥協を許しません。響板に採用されている木は、あのヴァイオリンの名器ストラディバリウスと同じフィエンメ谷産のレッドスプルースを切り出して使用してあり、音の鳴りとエレガントな響きは上位モデルにも引けを取りません。サルヴィがたとえエントリー・モデルだからといって、けっして手を抜かない姿勢を体現したモデルとも言えるのです。スタイリッシュな形状に加え、メロディックなコンサート・ハープ並みのヴォイシングや豊かで深みのあるトーンを提供する一方で、何よりも扱い易さとちょうどよい重さが、きっとお値打ち以上のフィーリングを与えてくれることでしょう。（写真＝47EX）

# Daphne
ダフネ